

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520429

研究課題名(和文) 中世北インドの詩人の系譜 ヒンドゥー教詩人とイスラム教詩人の交流と葛藤

研究課題名(英文) Mutual influence between Hindu and Muslim poets of Medieval North India

研究代表者

長崎 広子 (Nagasaki, Hiroko)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：70362738

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：ヒンディー文学史上のバクティ期を代表するヒンドゥー教の詩人(トゥルシーダースとスールダース)とイスラム教の詩人(ラヒームとラスカーン)の交流を考察し、それを聖者伝と文体から明らかにした。四人の詩人たちの文体、中でも韻律を分析することで、トゥルシーダースが他の三人が得意としたパド、バルヴァイ、サワイヤーの韻律を取り入れ、より洗練させた形で自ら著していたことが成果として得られた。それを裏付けるように、トゥルシーダースはこれら三人の詩人すべてと接点があったことが『上人伝要解』という聖者伝に詳細に記されていることが分かり、古ヒンディー語アワディー方言のこの作品を解説をつけ、日本語に翻訳した。

研究成果の概要(英文)：Interchange between Hindu poets Tulsidas and Surdas, and Muslim poets Rahim and Raskhan was discussed through the hagiographic evidences and the similarities and differences of the literary style in their works. Introduction of metres from Muslim poets to Tulsidas, such as Abdur Rahim Khankhana and Raskhan, who are the masters of the metres Caupai-Doha, Barvai and Savaiya, respectively, share metrical styles with Tulsidas, was confirmed by the description in the Mul Gosain Carita by Bani Madhav Das. This research especially investigated the rhythmic function of metres in the works of Tulsidas, elucidated the characteristics of metre Tulsidas used, and discussed how Tulsidas established his original style adopting metrical styles which are considered to come from other poets.

研究分野：中世ヒンディー文学

キーワード：ヒンディー インド ヒンドゥー教 イスラム教 文学

1. 研究開始当初の背景

(1)バクティ時代(1375-1700)とよばれる中世の北インドでは、イスラム教徒の支配者のもとで宮廷文化が花開く一方で、多くのヒンドゥー教の詩人がそれぞれの地域で活躍した時代である。神への一途な帰依(バクティ)を当時用いられていた大衆の言語で歌いあげた詩人は、バラモンを頂点としたヒンドゥー教の伝統から一線を画し、大衆的な宗教運動を展開した。彼らの作品は今日も人々に感動を与えて信仰の拠り所となっており、バクティ文学はヒンディー文学史上だけでなく、今日にいたるヒンドゥー教の形成においても重要な影響を与えてきたといえる。

バクティ時代はヒンドゥー教のバクティ詩人とともにイスラム教の詩人たちも活躍した時代であるが、両者の関係についてはインド国内外でもほとんど研究されていない。初期の新インド・アーリア語の文法がよく整備されていないことや、韻文で書かれているため、理解が困難で、バクティ文学の研究そのものが十分にすすんでいないという実情もある。だが、このうちイスラム教徒はペルシアの文学伝統を取り入れ、ウルドゥー文学という独自の文学様式を確立させていくなかで、その前段階としてバクティ時代を両者の関係をとおして考察することは重要である。一般には宗教の違いによる文学形式の差がまだほとんどなかった時代だと考えられているが、本当にそうであったのかどうかを証明するためには、作品分析によるデータが必要である。

(2)本研究の代表者は、これまでの研究でヒンディー韻律の構造の研究を行い、外来のペルシア韻律を採用したウルドゥー韻律にインド固有のヒンディー韻律と類似するリズム構造があることを論文発表等で明らかにしてきた。

また、中世ヒンディー文学に関連して詩人トゥルシーダースの聖者伝の変容を扱い、ヒンドゥー教徒のトゥルシーダースとイスラム教徒の詩人たちが実際に会って交流したとされる聖者伝が今日まで伝えられていることが分かった。だが、それを証明する歴史的な証拠はなく、交流の逸話は後世に創作されて聖者伝に加えられたことを拙稿「聖者トゥルシーダース伝の変容」で明らかにした。

しかし、このような伝承が造り出された背景には何らかの理由があったはずで、それはバクティ時代のヒンドゥー教徒とイスラム教徒の作品に多くの共通点があるために両者の間に交流があったと思われたのではないかと考えるに至った。そこで、これを裏付けるために、バクティ時代を代表するヒンドゥー教徒とイスラム教徒の詩人の伝記や聖者伝に詩人たちの交流がどのように描かれ、どのように変容したか

を考察し、またそれぞれの作品の文体を分析して共通性を明らかにする。しいては、イスラム支配下の中世の北インドにおける両宗教の詩人と作品の関係を解明することが研究開始当初の代表者の研究動機とその背景であった。

2. 研究の目的

(1)中世のバクティ時代に、北インドで活躍したヒンドゥー教の宗教詩人とイスラム教の詩人の関係を今日に至る聖者伝の描写から探る。

(2)ヒンドゥー教詩人とイスラム教詩人の著作から、宗教が異なることによって文体にどのような違いと共通点があったのかを分析する。

(3)宗教の違いを超えて両者の間であったとされる交流の有無について、聖者伝の記述と文体から総合して解明する。

3. 研究の方法

(1)伝承の考察: 中世バクティ時代を代表する詩人トゥルシーダース、スールダース、ラヒーム、ラスカーンに関してヒンドゥー教の聖者伝(『信徒列伝』とその注釈)とイスラム教の伝記から描写を抽出して翻訳し、交流伝承の形成過程を明らかにする。

(2)文体の考察: 上記の四人の詩人の作品を電子テキスト化し、文化的背景を知るために、作品中のインド・アーリア系語彙とサンスクリットからの借用語とペルシア・アラビア系語彙の使用頻度をデータ化した。また、電子テキストから四人の詩人の韻律の用法を音節の軽重におきかえてデータ化する。

(3)バクティ時代におけるヒンドゥー教徒とイスラム教徒の詩人と作品の関係の考察: 明らかにになった両宗教の詩人たちの交流伝承が、文体の特徴から裏付けられるかどうかを、(2)のデータから考察する。

4. 研究成果

(1)聖者伝に描かれた詩人たちの生涯と交流

本研究では聖者伝文学と伝記をとおして四人の詩人の生涯と彼らの交流を明らかにした。

ヒンドゥー教詩人のスールダースは、ヴァッラバ派の聖者伝 *Caurasi Vaishnavon ki varta* に記されており、ブラジ・バーシャー語で記されたテキストを全訳した。なお、ムガル皇帝アクバルとの面会が強調されているが、史実かどうかは疑わしい。また、その他の記述も彼の神聖さを美化するために著されており、ヴァッラバ派におけるスールダースの位置づけが分かるものの、史実としての信憑性は疑わしい。

イスラム教徒詩人のラヒームについてはムガル帝国のアクバル帝の廷臣であったことから、『アクバルの書』に記された内容から知ることができ、またその生涯については

史実からかなり詳細に追うことができる。近年出版された専門書の記述も参照したうえで、彼の生涯について論文「アブドゥル・ラヒーム・カーンカーン著『バルヴァイ詩集』 - ムガル廷臣のクリシュナ讃歌 -」にまとめ、また彼の著したバルヴァイ詩集を日本語に全訳紹介した。

もう一人のイスラム教徒詩人ラスカーンについては、詩人本人は詩集の中でデリーの宮廷での争いを避けてブラジ地方に移り住みクリシュナ信仰に入信したことを記しているのみであるが、彼が属していたとされるヴァッラバ派の聖者伝 *Do sau bavan vaishnavon ki varta* 内には彼の同宗派への入信の経緯が詳細に記されていた。だが、これらのなかに史実と解釈できる内容は見つからず、またラージャスターンとプリンダーワンに現存する彼の作品の写本を調査した結果、ラスカーンという名の詩人が複数いた可能性もあるため、その人物像については不明な点が多い。なお、彼の生涯について知ることのできる資料は現時点では上記のものとそれをもとにして後に記されたと考えられる伝記以外には発見できなかった。

だが、もう一人のヒンドゥー教詩人トゥルシーダースの伝記については、本研究で重要な発見があった。彼の弟子ベニー・マダオ・ダースがトゥルシーダースの死後7年の1623年に著したとされる『上人伝要解』にはトゥルシーダースとその他の詩人たちの交流が詳細に記されていることが明らかになった。この聖者伝の特徴は、トゥルシーダースと交流のあったと伝承されている同時代の著名な詩人たちがほぼすべて描かれている点である。本研究の対象としたスールダースはトゥルシーダースの庵を訪れ、音楽形式の詩を披露し、それに触発されたトゥルシーダースが *Gitavali* と *Krishna Gitavali* という同形式の2作品を著した逸話が詳細に記されていた。また、ムスリム詩人ラヒームとの交流は、ラヒームが *Baravai* という新しい韻律のリズムを用いた詩をトゥルシーダースに送ったことから、それにトゥルシーダースも *Baravai* 韻律を用いて返信したことが描かれており、その後この韻律を用いて *Baravai Ramayana* というラーマヤナ物語をトゥルシーダースが著したことが記されている。現在流布している伝承では、ラヒーム自身がムガル皇帝アクバルの命でトゥルシーダースを訪れたとされており、『上人伝要解』の記述とは異なる点が明らかになった。

また、もうひとりのイスラム教徒詩人ラスカーンとトゥルシーダースとの交流については、トゥルシーダースの著した *Ramacaritamansa* をラスカーンがヤムナー川岸で人を介して聞いたことが記されており、この記述が事実であるならば、面識はなくてもトゥルシーダースの名声がラスカーンにまで届いていたことがうかがえる。

だが、この『上人伝要解』は写本がまった

く発見されていないにも関わらず、テキストが流布しており、また内容の点での信憑性の問題もある。

なお、『上人伝要解』のテキストで用いられた言語にヒンディー語西部方言のカーリー・ボーリーの要素が認められることから、19世紀後半の作品ではないかと考えられる。

創作年の問題はあるものの、このテキストは、これが著された時代まで閉ざされたコミュニティの間で流布していたトゥルシーダースの伝承を集めたものであり、その重要性はきわめて大きいといえる。

現地においても入手困難なテキストであり、地方語を多用した古ヒンディー語の難解な言語であったが、この聖者伝の発見にいたる経緯を解説したうえでテキストの前半部分の日本語翻訳を論文「ベニー・マダオ・ダース作『上人伝要解』」で発表した。

(2) 文体の分析

本研究では、語彙と韻律分析をとおして、詩人たちの文体における共通点と相違点を考察した。

インド・アリア系の語彙とペルシア・アラビア語の語彙の分布表を作成した結果、ヒンドゥー教詩人のトゥルシーダースとスールダースもペルシア・アラビア系語彙を使用しているものの、極めて限定的なものである。また、この傾向はイスラム教徒詩人のラスカーンにおいてもほぼ同様であり、宗教の違いによって語彙の差はほとんど見られなかった。しかしラヒームは、インド固有の韻律と伝統的なヒンドゥー教神話を題材に用いながらも、一部の詩節をペルシア語で著し、また脚韻を踏む際にペルシア語の語彙を用いており、ほかの詩人たちとは一線を画している点が明らかになった。

また、韻律の分析を通して、トゥルシーダースはスールダースからは *Pad*、ラヒームからは *Baravai*、ラスカーンからは *Savaiya* 韻律を取り入れ、自ら作品に著し、その際に音節のモーラを44または332でまとめることによりリズムを整え、ほかの詩人たちよりも洗練された作品に仕上げている点が明らかになった。この問題については、“Phonology of Hindi as reflected in metre”と題して論文にまとめ、海外の査読付き学術誌に投稿した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

長崎広子, ベニー・マダオ・ダース作『上人伝要解』(上), 印度民俗研究, 査読無, 第14号・21-44, 2015年03月, <http://hdl.handle.net/11094/51411>

長崎広子, アブドゥル・ラヒーム・カ

ーンカーナー著『バルヴァイ詩集』 -
ムガル廷臣のクリシュナ讃歌- , 印度民俗
研究, 査読無, 第 13 号・43-63 , 2014
年 03 月,
<http://hdl.handle.net/11094/27069>

長崎広子, 詩人ラスカーンと『愛の庭』
- テキストと解釈 - , 南アジア言語文
化, 査読有, 7・61-79 , 2013 年 03 月

長崎広子, トウルシーダース作『ド
ハーヴァリー』(2), 印度民俗研究, 査
読無, 第 12 号・55-71 , 2013 年 03 月,
<http://hdl.handle.net/11094/50060>

〔学会発表〕(計 3 件)

長崎広子, ヒンディー・バクティ詩に
用いられた韻律—四人の詩人の作品を
とおして—, バクティ研究会, 2015 年
1 月 10 日、東京外国語大学本郷サテラ
イト(東京都)

Hiroko Nagasaki, One language and
Two Metrical Systems: The case of
Hindi-Urdu , Coffee Break
Conference , September 5, 2013,
Università di Torino, Turin (Italy).

Hiroko Nagasaki , The language and
literary style of Raskhān's poetry ,
11th International Conference on
Early Modern Literature in North
India , August 3, 2012, *Indian
Institute of Advanced Studies*,
Shimla (India).

〔図書〕(計 3 件)

Hiroko Nagasaki , "Matra in Bhakti
Poetry and Pero-Arabic Metres" In
*Bhakti Beyond the Forest: Current
Research on Early Modern Religious
Literatures in North India 2003-2009* ,
Manohar, 2013, pp. 353-366.

Hiroko Nagasaki ed., *Indian and
Persian Prosody and Recitation*, Delhi:
Saujanya Publications, 2012, 386 p.

Hiroko Nagasaki , Hindi Metre: Origins
and Development , In *Indian and
Persian Prosody and Recitation* , Delhi:
Saujanya Publications, 2012, pp.
107-129.

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

長崎 広子 (NAGASAKI, Hiroko)
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号 : 7 0 3 6 2 7 3 8